

小學讀本

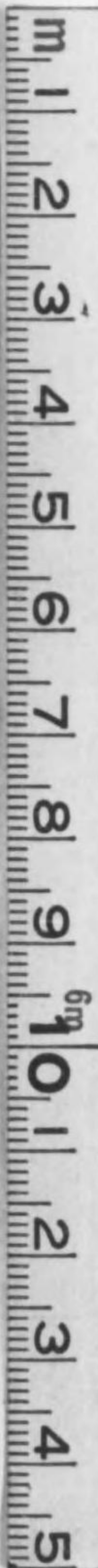
三

特279

特279-256



1200501132166



始



特279-256

12/22/23

賤 富 唯 屑

# 小學校教科用書



# 小學讀本

明治二十三年四月 文部省編輯局

小學讀本卷之三

## 第一課

職業に貴賤無し

○紙屑買

○古金買

○賤しき

○厭ふ

○心得違ひ

人の貧しきと富めるとは、多くは其職業によるものにあらず、唯其人の勉強するとせざるとによることなり。又世の中に、紙屑買、紙屑拾、ぼろ買、古金買、破硝子買などを、賤しき商賣なりとて、間厭ふ

特279-256

12/22/23

賤 富 唯 屑



小學讀本卷之三

第一課

職業に貴賤無し

○紙屑買

○古金買

○賤しき

○厭ふ

○心得違ひ

人の貧しきと富めるとは、多くは其職業によるものにあらず、唯其人の勉強するとせざるとによることなり。又世の中に、紙屑買、紙屑拾、ぼろ買、古金買、破硝子買などを、賤しき商賣なりとて、間厭ふ



小學校教科用書



小學讀本

明治二十三年四月 文部省編輯局

厭 違 選 專

ものあれど、こは、甚しき心得違ひなり。何となれば、世に無くてならぬものならば、いかにきたなくとも、其業の貴さは、少くも他の清く美しく、きものにおとらぬものなり。故に、人は、何職何業を問はず、能く我身に叶ひたるを選びて、少くも厭ふ事なく、心を専らにして勉強すべき事なり。

作文 話の書取り

第二課 もしくは ○木挽 ○箆筒 ○庖丁

挽 倉 箆 筒 針 庖 丁 鋸

世にも、鋤、鍬、鎌無くば、農夫は、何にて田畑を耕す可きぞ。世にも、鋸、鉋、鑿、錐、斧なくば、きこりは、何にて木を切り出し、木挽は、何にて木を挽き、大工、指物師は、何にて家、倉をたて、箱や箆筒を作るべきぞ。もく又屋根葺に、かなづちと、はさみと無く、疊指に、針と庖丁となく、左官に、鋺無くば、如何にして、屋根を葺き、疊を指し、壁を塗らんや。汝等、是等の道具を作る者は、誰なるを知れりや。其

人は、今、つぎの課に出て来るべし。

作文 (一)指物師に、机を注文する文。(二)同じうけあうたる文。

第三課 鍛冶 一 ○鐵鋏 ○鐵槌 ○鐵床

○物どもせず ○すさまじく

こゝに人あり、其人は、土さへ裂くる夏の日に、足の  
さきには、鞆フクロを使ひ、左の手には、鐵鋏をにぎり、右  
の手には、重き鐵槌をふり揚げて、赤くやきたる鐵  
ぎれを、鐵床の上にて打ちたたけり。たゞくに連

鍛 冶 裂 鉄

れて飛び散る火花を、物どもせず、いとすさまじく  
働けり。こは、是れ如何なる人ぞ、汝等の知れる鍛  
冶屋なり。

作文 鍛冶屋の作るものは、何々なるか。

第四課 鍛冶 一 ○馬車 ○うなづきて

○志ばしが間 ○銀貨

此時、一つの馬車來りて、其前に止まれり。車の内  
にて、「鍛冶屋どの、急ぎ、車の留釘を作りて下され

槌 飛 床 散 急 留

といふ。鍛冶屋は、直にうなづきて、まばしが間、汗も拭はず打ち鍛ひくが、たちまち其望に叶へる釘は出来揚れり。其人、よく速に出来たりと打ち、悦び、一圓の銀貨を取り出し、是れて其身の汗を



初田画

拭うて下され」といひて、其手の内にれくやいなや、ふたゝびむちを揚げてはせ出でぬ。

作文

(一)一帖二錢の紙三帖、一丁五錢の墨二丁を賣りし時の請取。

(二)三十錢の本一冊、八錢の硯一つ、五錢の洋紙一枚を賣りし時の請取。

請取。

第五課 愚なる男 一 ○堪へかねたり

○危きに ○見合はせたり

こゝに一人の男あり、いと愚なる男なり。初めは樵となりたるに、斧の重さに堪へかねたり。次に

危 恐 驚 厚 杵 臭

は木挽となりたるに、大鋸の重さに堪へかねたり。  
 次には大工となりたるに、手斧の危きに恐れさり。  
 次には屋根屋となりたるに、屋根の高さに驚けり。  
 次には疊指となりたるに、床の厚きによわりたり。  
 次には鍛冶屋となりたるに、夏の暑きにこまりたり。  
 次には農夫となりたるに、肥の臭きにこまりたり。  
 次には米搗となりたるに、杵の重きに見あ  
 らせたり。終には紙屑拾と思ひしが賤しき業と

若 遂 泣 待

て見合はせたり。

作文 ○金錢の種類

第六課 愚なる男 一一 ○遂げざりし

○與ふる物 ○悔ゆるのみ

いと愚なる此男、もはや爲すべき事も無し、此上爲  
 すべき時もなし。ア、我ながら愚なり。我は、何  
 とて若き内、樵の業をば遂げざりし。我は、何とて  
 若き内、紙屑拾をせざりしと泣けどさげべど手

命 紫 與 悔

は利かず、足叶はぬば、唯人の、投げて與ふる物を  
待ち、細き命を繋ぐのみ、老いたる身をば悔ゆるの  
み。

作文 (一)注文の品物を送る文。 (二)同じ請取の文。

第七課 小兒等の遊歩 一 ○小兒等

○途中 ○大豆 ○小豆 ○見聞

途 兒

今五六人の小兒らは、打ち連れて、村里より町近き  
所に來れり。此小兒等は、途中に如何なる物事を

干 炭 燒 烟 薪 音

見聞せし。今は秋なれば、  
田畑には、稻をかり、わたを取  
り、大豆、小豆などを掛干すを  
見、また遠き野山には、炭を燒  
く烟、近き林には、薪を切る音  
などを見聞せしなるべし。

作文 ○話の書取

第八課 小兒等の遊歩 二 ○染物屋





○聳にたる ○印し

聳 染 印 旗 響 鍋 桶

小兒等は、町近き所に來りて、又如何なる物を見聞するや。先づ高く聳えたる火の見は、もとより、染物屋の染物の、高く風になびくを見、其他様々の印しある旗などを見るなるべし。又次第に耳に響くものは、鍛冶屋の鐵を鍛ふ音、銅屋、ブリキ屋などの赤鍋、やくあんなどを作る音、米屋の米を搗き、桶屋のたがを掛け、大工、指物師の木を挽き、釘を打つ

綿

等 賑 勇

音、又近づきてハ、綿打の綿を打ち、機屋の機を織る音などなるべし。

作文 (一)人を遊歩にさせふ文。(二)同じ承知の文。(三)同じことわりの文。

第九課 小兒等の遊歩 三 ○勇まじく

○天長節

此小兒等は、右の如き種々なる物を見、様々なる音を聞きて、一人の小兒「ア、賑やかな事では有りませぬか、私は、人々が、何時よりも賑やかに、うして

節 喜 祝 積

勇ましく、働く様に思はれますが、皆様は、如何て有りますかといへば、今一人「左様で有ります、これは私どもが待ちに待つ、天長節が近づいたゆゑ、人も喜しく有り、また其前に、仕事を勉強して、緩々天皇陛下を祝ひ申す積り故で有りませう」などいひあへり。

作文 ○此ツギノヤスミニドコデア何ヲシテ遊バウト思フカ、又其處ハドノヤウナ所カ。

治 給 末 奥 共 萬 歳

第十課 天長節 ○我國にだに ○諸共に ○聖壽萬歳

天長節は、汝等も知る如く、我大日本國を治め給ふ天皇陛下の生れさせ給へる、めでたうともめでたき日なれば、たとひ野の末、山の奥にても、我國にだに住むものならば、諸共に、職を休み、業を止め、悦び樂みて、聖壽萬歳と祝ひ奉るべきことなり。

作文 (一)天長節に人をまねく文。(二)同じ返事。

第十一課 天長節の歌 第四段

段 惠 民 榮 臺 柴 君

○民草 ○大御世 ○我大君

○萬世 ○千世 ○八千世

○今日

惠の露のかゝらずば、民  
草いかで榮ゆべき。此  
大御世に生れずば、此さ  
ちいかで得らるべき。  
玉の臺も柴の戸も、我大



新田画

敬 尊

君の萬世を、祝ふ盃とりくくに、歌ふ今日こそ樂  
けれ。

君は千代ませ、八千世ませ。

君は千代ませ、八千世ませ。

作文 ○話の書取

第十二課 親 ○敬の尊ぶ ○愛し親しむ

汝等は、皆、我天皇陛下の、此上もなく尊くあらせら  
れて、諸共に敬ひ尊び奉るべき事は、常に忘れぬこ

思 答 問 位 親 愛

となるべし。よかるに、今、天皇陛下に次いで、敬ひ  
尊ぶべきものを、誰と問はば、如何に答ふるや。汝  
等は先づ、其次ぎ次ぎの、位高き人を思ひまはすな  
る可し。位高き人々を敬ひ尊ぶべきは、もとより  
の事なれど、近く我身を生みそだてたる親有れば、  
先づ是れをば敬ひ尊び、其上にも、ふかく愛し親し  
むべきものなるべし。

作文 (一)人の家の無事か、いなやを聞合はする文、今日こそ樂し

悲 衰 居 面 育 勞

第十三課 老 ○たくまじかりし ○身體 ○立居

○末頼もしく ○面白 ○父祖 ○孝行

れよろ、人の年老いたるほど、あはれに悲しきは無  
かるべし。昔は、強くたくまじかりし身體も、次第  
に衰へて、今は、立居さへ、思ふまゝならず、昔は、行  
く先き長しと思へば、何事を爲すにも、末頼もしく  
て、勇まじかりし心も、今は、弱りはて、何一つ樂  
しく、面白きことも無くなりぬ。れよろ、是等の人

孝 祖

々は若き時より年老ゆるにいたるまで、多年の間、其子や孫を養ひ育つる爲に、心を苦め、身を勞したるものなれば、其子孫たるものは、常に、父祖を敬ひ尊びて、ひたすら其老をなぐさめ、厚き養育の恩に報ゆべし。すなはちこれを孝行といふなり。

作文 ○孝行とい、如何なる事なるか

第十四課

紙屑買

○本手 ○餘分 ○しとやうに ○立派

籠 或 飢 逢 救 餘 禮 廣

こゝに、れ孝とよべる貧しき女の子あり。常に紙屑を買ひ歩き、母とともに、老いたる祖母を養へり。れ孝は、いつもの如く、紙屑籠を肩にまっつゝ、或村里に入らんとす。其時途中にて、あはれに飢ゑたる老人にゆき逢ひたり。れ孝は、如何にもして



柳田南

此老人を救ひたくは思へども、本手より外、餘分の金無ければ、爲すべき様なり。されば、少く近づきて、とやかに禮を爲して、行き過ぎたり。老人は、これを見て、喜びげに、ア、善き女の子よ、此廣き世の中に、禮を爲してくるゝは、そこばかりごとて、いと悦べる様子なりき。

作文 (一) 我家内の無事を知らする文。

第十五課 紙屑買 二 ○あるじ ○十錢銀貨

詰 堅 包 威 請 逃 連 納

○請け納め ○なさけ

さてれ孝は、其村に入り、或家にて紙屑を買ひ、それを籠に詰め入るゝに、何やら、堅き物の、手にさはりたれば、取り出し見るに、十錢銀貨の紙に包まれたるなり。驚きて、其家のあるじの前に出せば、あるじは、れ孝の正直なるに感じて、かへすにれよばずといへども、れ孝は、けつして請け取らず、早や逃げ出でんとするを、あるじは引き留め、強ひて其ふと

ところに推し入れたり。れ孝は、其時急に、前の老人の事を思ひ出したれば、厚く禮を述べて、請け納め、直様前の老人にねひ付き、其故を話して、これを惠みければ、老人は、ふかくれ孝のなさに感じ、なみだながら、禮を述べしとぞ。

作文 ○話の書取

第十六課

禮信仁

○詐り欺く ○我力に應じ

○行ひ方 ○備へて

誰 欺 信 應 情 仁 備

れよろ、人に對して、敬ひ愛する意を表はすは、これを禮といひ、正直にして、少くも詐り欺くこと無きは、これを信といひ、又我力に應じて、人に情をかけ、惠み助くるは、これを仁といふ。人たるものは、常に此三つの徳を備へて、一つをもかくべからば、えからざれば、善き人とはいはれぬなり。人も、善き人といはれずば、更に世に生れたるかひ無かるべし。汝等は、前の課なる、れ孝が話をよく

味ひて、禮、信、仁の行ひ方を心得べし。

作文 (一)歳暮の祝の文。(二)同じ返事。

第十七課

鹽

○うしほ ○海邊 ○鹽田 ○煮詰 ○何方

汝等は、鹽の鹽辛く、さたらの甘き事は、能く知りたるならん。されど、未だ何より取り、如何にして製するものなるかを、知らざるものも有るべし。鹽は、常に、海水より取るものにて、其の仕方は、うしほをくみて、海邊の砂原に、度々うしほぎ散らして、日

辛 甘 製 海 邊

乾 竈 煮

に乾かせば、鹽は、砂粒の表にこはばり付く、この砂原を、鹽田といふ。さて、其砂をかきよせて、竹ざるにもり、水をかけて、其鹽をとかり、それを竈にて煮詰むれば、つひに白く清らかなる鹽となるなり。れよろ、鹽は、海邊の國國には、何方にても製するも





のなれど、最も名高きは播磨の國の赤穂、阿波の國の齋田にて、製するものなり。

作文 ○善き人といふどのやうなる人なりと思ふか。

第十八課

砂糖

- 上等
- 上品
- 器械
- 蠣灰

- 蜜
- 白下
- 太白
- 三盆
- 雪白

○簡略

砂糖は、多くさらうきびより、まぼりたる汁を製するものあり。其品に黒、白、氷の三種あり。今、

糖 菓

器 械 蠣 蜜 簡 略

白砂糖の製し方をいはず、先づさらうきびの莖を、器械にて、しめて、其汁をしぼり、これに、少しばかりの蠣灰を交へて、煮詰むるときは、砂糖と砂糖蜜と交れる、白下といふものになるなり。この白下を、ぬのに包みて、たしぶねにかけておせば、砂糖蜜は、流れ出て、砂糖は、ぬの、内に留



まるべし。此砂糖を取り出して、手にてねり廻はし、ふたゝび、もとのぬのに包みて、ねしをするあり。かくすること度々すれば、色白くあり、次第に上品となるなり。太白、三盆、雪白などいふは、其品々の名なり。黒砂糖は、其製最も簡略にて、右のまほり取れるまゝの汁を煮詰めて、之に多くの蠣灰を交へてかためたるものなり。又氷砂糖は、上等の白砂糖をとかり、煮て、仕方を以て、其内にふくめる

かすやあくたを取り、之を緩々と冷やすなり。砂糖を製する所、多しといへども、白砂糖は、讃岐、黒砂糖は、薩摩、大隅を以て、上品とす。

作文 ○年始の文。

第十九課

油 蠟

○舉げ難けれど ○日用 ○油茶

○油桐 ○食用 ○桐油 ○魚油 ○石油

○蠟燭

油は、其種類甚だ多くして、一々舉げがたけれど、今

舉 桐 餅 弱 燈 鮭 燭

其日用の品のみをいはゞ、胡麻、油菜、綿苳、油桐な  
どの實をえぼりて、取りたるもの、鮭、鯖、などの魚  
類をえぼりて、取りたるもの、ならびに、石油等なり。  
胡麻油、菜種油は、常に食用となり、また燈し油とも  
なす。綿實油、魚油は、燈し油にのみ用ひ、苳の油、  
桐の油は、桐油、からかさ紙などを製するに用ひ、石  
油は、専ら、らんぷに用ふるものにて、石油をふくめ  
る地をふかく掘りて、くみ取りて製したるなり。

寝 起 峰

蠟は、漆、はぜ漆などの實、または、はちのす、鯨のあ  
ぶらなどより製するものにて、これをもちて、蠟燭、  
びん付けを製し、其外様々の用をなすものなり。

作文 ○話の書取。

第二十課 炭焼き ○祖父 ○寝起き ○炭商人

こゝに、細長き木を、竈の内に積み居る老人あり。  
其側に、木を運びなどして、其老人を助け居る小兒  
あり、是は、祖父と孫とにて、炭を焼く所なり。其

塞 消 俵 櫓

あきの方に、木の枝にて葺きたる小屋あり。これは炭を焼く間、此二人が、寝起きするところなり。こゝは、さびしき山の奥なるが、我等が、時々遠くより見ることある、峯の烟は、かゝる所より立つものなり。さて、炭を焼くには、竈の中に積みたる木に、火を付け、少くもえ



あがりたる時に、其口を塞ぎて、火を消すなり。其火の能く消えたる後、ちつかに炭を取り出し、これを俵に入れて、ふもとに運び下し、炭商人に賣るなり。凡そ、炭に焼く木は、櫓、くぬぎ、檜などの堅き木をよしといふ。又ほ、この木にて、製したる炭ハ、多く物をみかくに用ふ。

作文 ○花見二人ヲマネクコトバ(之ヲ手紙ニ書キ直スベシ)

アタ、カナシセツニナリマシタガ、オタツシヤデオメデタク

グンシマス。シカレバ、ワタクシカタニチカキ山ザクラ、イマガ。  
サカリデアリマス。モシオヒマナラバ、オイデナサレマセヌカ。  
イナヤゴヘンシヲネガヒマス。

第二十一課 茶烟草 ○蒸籠 ○焙爐 ○何處

○産物 ○刻烟草 ○一面 ○差あり

茶は、椿など、同類の植物なり。これより、茶を製するには、夏の初に新芽を摘み取り、それを蒸籠にて蒸すか、又は熱湯にとほしたるを、焙爐にて焙り

摘新椿

産差爐焙蒸

ながら、手にてもみ乾かすなり。茶は、其製り方により、上中下の品々ありて、其價も亦大なる差あり。我國産物中の重なるものにして、何處にもこれを出すとはいへども、古くより名高きは、山城の宇治なり。烟草は、莖太く、葉廣く、一面に細かなる毛あり。



物田画

春、種を蒔き、秋になりて葉  
を取り、これを乾して、刻烟  
草、又は卷烟草に製す。烟草  
を産する地、甚ど多しといへ  
ども、最も世に聞えたるは、  
國府烟草、薩摩烟草なり。



作文 ○焙爐 ○蒸籠

第二十二課

つゝゝむ可きもの

慰 飲 程 害 勿 論

○身体 ○勿論 ○身を持ちくづす

酒、烟草、茶、菓子の類は、多くは慰みに飲み喰ひす  
るものにて、よき程に用ふれば、別に大なる害には  
ならぬものなれど、とかく程を過し易きものなり。  
されば、成る可くつゝゝみて、多く飲み喰ひせざる  
様にすべし。中にも酒の類は、最も恐ろしきもの  
にて、其身体を害することの甚しきは勿論、これよ  
りして、心を亂し、身を持ちくづすはじめとなる。

こと多きものなれば、年若き中は、必ず飲みならふべからば。

作文

○花見ニマネカレシ時ノ返事ノコトバ。前ノ如ク手紙ニ書キ直

スベシ。オホセノトホリ、アタマカナシセツデアリマスガ、マス

マスゴキゲンヨクイラツシヤリマシテ、オメデタクゾンジマス。

サテ、花見ノコトオマウシコシデアリマスガ、アヤニクサシアヒ

ガアリマシテ、ザンネンナガラマ并リカネマス。ナニトゾ、アシカ

ラズ、オボシメシクダサリマセ。

第二十三課

教を守る時なり

○残念

一筋の川を、西と東とにへだて、二つの村あり。或時、此方の子供の揚げたる帆、あやまりて向岸に落ちかゝるを、向ふ岸なる子供は、情なくも之を川中へ投げ入れたり。此方の子供は、残念に思へど、川をへだて、の事なれば、せん方もなかりき。然るに、其後、向岸なる子供、此方の岸の柳に引きよれば、此方の子供は、すは怨をかへすは、

耻

此時ぞと、かけよるを、一人の子供、これをれいとめ、君達は、先きにかれらのせし事を、悪き事と思はず、やといへば、皆々、もとよりなりといふ。其子供、悪き事は、必ず學ぶなどは、常々先生の教へらる、事ならずや。されば、今は、我々の怨を反す時にあらずして、先生の教をまもるべき時なりと思ふは、如何にといふ。皆々は、いづれも善きものなれば、いかにももつともなりとて、其凧を破れぬ様に取り

学 格

り下ろし、これをさし上げて、糸を引かせければ、向岸の子供は、大に耻ぢ入りて、一向前日の悪かりをわび、これよりたぐひに睦しくなりととかや。

作文 ○凧の作り方。

第二十四課 紙 苧 ○洋紙 ○質 ○通例

○延紙 ○雁皮紙 ○毎年

紙は、楮や三つまたの外、かはやなぎ、くは、藁、麥藁、竹などより製し、又洋紙の類は、ぼろ、木屑などを以



て製す。紙は、其質と製し方とによりて、種々なる名あり。今我國にて、最も通例なるものをいはず、奉書、糊入、美濃紙、半紙、延紙、西の内、半切、雁皮紙、ちり紙等なり。紙は、諸國製せざる所なくといへども、最も多く出すは、美濃、土佐などなり。



苧は、麻、苧麻などの皮より製したるものなり。麻、苧麻の類は、共に畑に作るものにて、麻は、一年草なり、苧麻は、毎年根より生ゆるものなり。苧麻は、糸、繩の類を製するのみならず、細くうみて、我々の夏の暑さを去るのくべき布、縮を織り、又其糸をあみて、網類をも作るべし。

作文 (一)夏の頃祭禮に人をまねく文。

第二十五課 綿布 ○衣服 ○木綿 ○縞機 ○機

衣 服 裁 割 好

○編割 ○背丈

汝等の、常に着る衣服は、何にて製せしものぞ。多くは、綿布なるべし。汝等は、其綿布の、かく衣服となりて、其身に着くまでには、如何程の手數のかゝりしことを知るや。今其あらまゝを言ふ可し。先づ、木綿を畑に作り、其實の熟して、綿を



物田園

背

はくを待ちて、これを取り、綿繰にて繰りて、種を去り、綿打師に頼みて、打綿となり、次にしにて巻き、て、しとの巻となり、糸車にて引きて、糸となすなり。其糸は、持車に繰りあげ、縞機ならば、縞割りをなして、これを染物屋に送り、好みの色に染めさせ、次にのりを付け、小籠に繰りて、縦糸と横糸とに分つ。縦糸は、延べてこれをうろへ、一筋づゝ綾にかけ、箴に通し、機卷に巻き、て、機に仕掛け、横糸は、くだに

巻きて、杼にはめ、織り揚げて綿布となすなり。また、  
志かる後、汝等の背丈けに合せて、たちぬひて、始て  
ろの身に着たるなり。

作文 ○木綿

第二十六課

蠶

○成長

○生糸

○縮緬

○繻子

○緞子 ○真綿

蠶は、桑の葉をのみ喰ふ虫にて、初は、黒く小さくて、  
毛虫の子ふにたれど、桑の葉を喰ふに従ひて、成長し

桑 蠶

吐 巢 繭 網 欄

し、四五十日も過ぐれば、太く、白く、すきとほる様  
になるなり。かくなれば、口より糸を吐き出し、我  
身をまとひて、巢を作り、  
其内にぬむる。其巢を  
繭といふ。此繭を煮て、  
其糸をほぐし、繰りて生  
糸となす。此生糸は、我國第一の  
産物なり。又繻子、緞子、縮緬、其他



新田画

種々の絹類を織る可き糸、及真綿等は、此繭より製す。蠶の類に、天蠶といふあり。これは、檉、楸、楮等の葉を喰ふ虫なり。其繭の糸を、絹布、縮緬などに織り入れたるを、やま、ゆ入りといへり。蠶を養ふ地は、諸國にありといへども、最もさかんなるは、信濃、上野、下野、羽前、磐城等なり。

作文 夏の頃祭禮に人にまねかれし時の文。

第二十七課 蠶と毛虫との問答

窮 屈 殺 慢 快 眠

○窮屈 ○仕合 ○あなどる様に ○安樂に

○亡ぼす ○ふみにじられたる

或時、一つの毛虫、蠶の處に來り、蠶に向ひて、「私は君たち程、仕合悪いものは有るまいと思ひます。君たちは、常に其様なるせまい物の内に、たゞこめられて、窮屈な目にあらうた上、はてには、人のために、情なく煮殺さるゝではござりませぬか。志かゝるれも君たちが、餘りにたゞろよゝの上に、私共

合 亡

の様な、いかめしい針を持しぬからで有りませう  
 と、我身をほこり、かつは蠶を慢る様にいひかけた  
 り。蠶は、つくづくと聞いて居さりしが、君の様に、  
 悪い所のみ言ひ立つれば、誰れも、仕合な者は有り  
 ますまい。私共か、かやうにして居ればこそ、人に  
 も愛せられ、常に好きな桑の葉を食うて、一生を安  
 樂にたくり、終には、快く眠につかれます。それを、  
 君は、何の能もなく、なまなかな針の自慢ばかり、

裁

て居らるゝと、かへりて人に悪まれ、身を亡ぼす種  
 となりますぞ」といふ時、「オ、いやな虫が」といふ  
 聲の下に、たちまち、ふみにじられたるは、其毛虫な  
 りき。

作文 ○話の書取

第二十八課

裁縫

○まとめせるは

○一反

○羽織

○股引

○足袋

○蒲團

此圖にまとめせるは、一反の綿布を裁ちて、通例の衣

服の袖、えり、たぐみ、後巾、前巾となせるを見せたるものなり。およろ、衣服の裁ち縫



ひは、女の職分中、最も大切なるものなれば、女たるものは、小兒の時より、心をこめて習ふ可きことなり。縫ひ方の中にて、ことに、上手、下手の見ゆるは、おくみさき、つま、袂形、袖口等なれば、よくつくこと

れらに心を付くべきなり。衣服の類には、袷、單物、綿入、浴衣、帷衣、羽織、袴、半天、帶、股引、脚半、足袋、夜着、蒲團等、其他種々のもの有りて、其裁ち方、縫ひ方をことにす。されば、品により、其職にあらざれば、能はざるものも有れば、うれらは、仕立屋に頼むべし。仕立屋には、通例の着物を裁ち縫ひするものと、足袋、股引の類のみを仕立つるものとあり。

作文 ○秋の頃、生糸の價を問ひにやる文。

第二十九課 衣服の色 ○萌黄 ○千草

藤 鳶 紅 淺 紺 萌

衣服の色には、白、黒、赤、青、黄、紫、萌黄などの外、紺、花色、淺黄、小納戸、千草、紅、茜、鳶色、葡萄色、藤色、桃色、柿色、蒲色、あめ色、鼠色等、其種類かぎりなく多し。其内、紺、淺黄、小納戸の類は、藍の葉を製したる汁にて染むるもの多く、紅色、桃色の類は、紅花といふ草の花より取りたる汁にて、染むるもの多し。

料 藍

其他、染色の種類により、種々のものを用ふれど、染むる品は、何によらず、染草又は染料といひ、これを染むるものを、染物屋、又は紺屋といへり。

作文 ○話の書取

第三十課 衣服の模様 ○無地 ○蒔繪

模 樣

れよる、衣服に、無地、形付、染模様、縞などの類あり、縞には、豎縞、横縞、格子縞、碁盤縞、飛白等の品々

あり。又模様の種類は、縞類と同じく、日々新模様  
出づるがゆゑ、其數かぎりなりといへども、多くは、  
左の模様をく

づゝ又は組合  
はせたるもの  
なり。其模様  
は、丸形、花形、  
菱形、鱗形、さ

は、丸形、花形、  
菱形、鱗形、さ

形丸



形花



菱



形鱗



形やさ



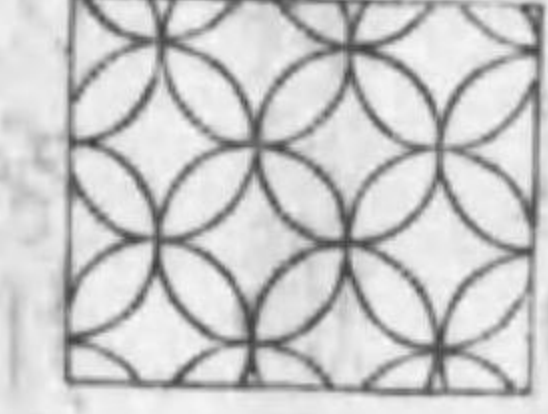
字万



んもいら



寶七



形甲龜

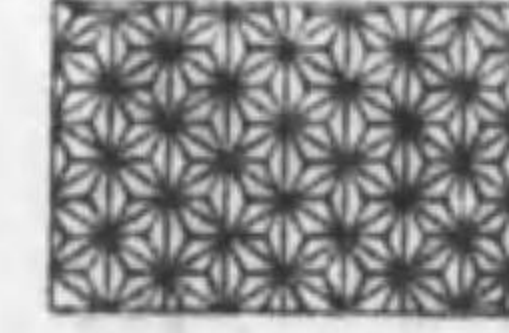


や形、万字、ら  
いもん、七寶、  
龜甲形、とりだ

きすだ鳥



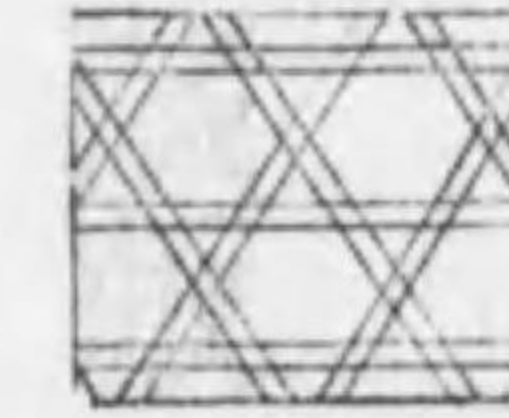
葉ノ麻



形垣檜

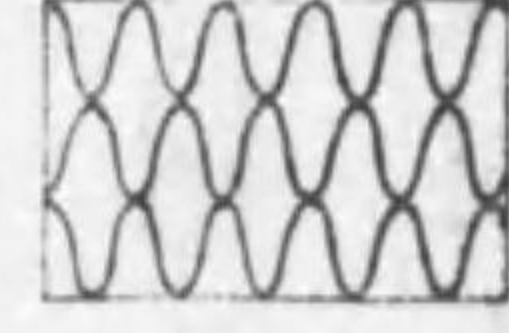


形目籠



すき、麻の葉、  
檜垣形、籠目形、  
網形、唐草、か

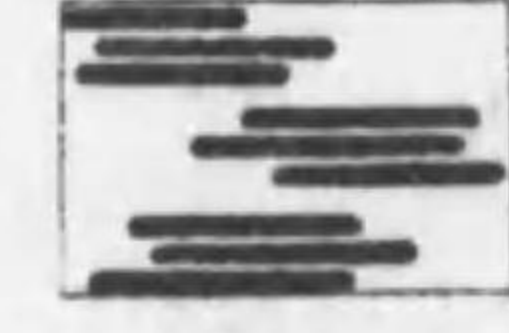
形網



草唐



みすか



形木朽



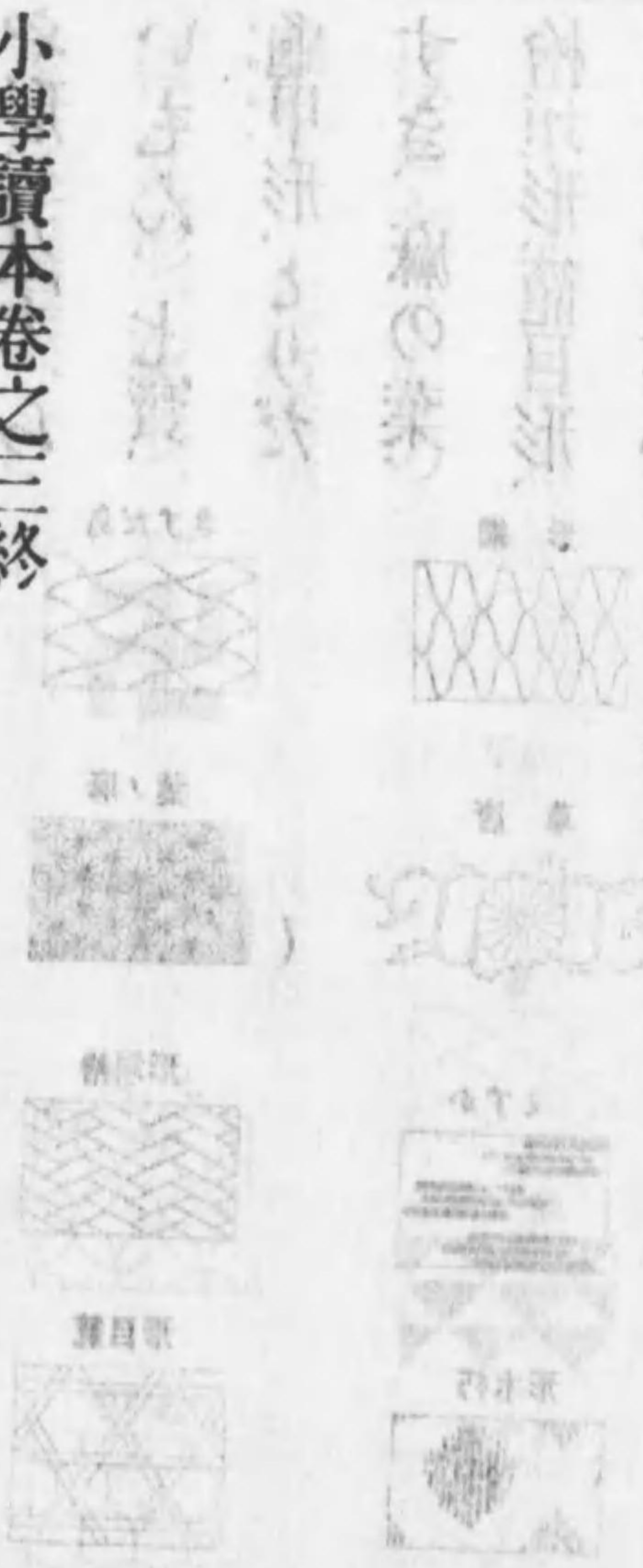
すみ、朽木形、其他花、葉、枝、鳥、虫などの散らゝ模様  
等是なり。これらの模様は、衣服の上のみならず、



畫師、彫刻師、蒔畫師、其他模様を取り扱ふものと、常に心を留むべきものなり。

作文 冬の頃衣服の裁縫を頼みやる文。

小學讀本卷之三終



明治廿三年四月十八日出版  
 版權所有 文部省編輯局藏版

此書籍ハ賣捌人ノ手ヲ離ル、トキ何等ノ名義ヲ附スルモ定價ニ超過セル金額ヲ買手ヨリ拂ハシムルコトヲ許サズ

(定價金六錢八厘)

終

